

ahaki

あはき あん摩・はり・灸のおしごと

vol.06

今こそ ahaki という選択
～澤登 拓の提示する可能性～

Autumn, 2026



株式会社フレアス
代表取締役社長 CEO

澤登 拓

人と関わるのが苦手で、将来に希望を持てなかった青年が、中国留学をきっかけに「あはき師」という資格に出会い、「訪問マッサージ」（注）という仕事を選んだ。その現場では寝たきりの患者と向き合い、「ありがとう」と言われる経験を重ねる中で、自分自身も救われていったという。

いま、AI 時代の到来や働き方の変化のなかで、あはきの価値が改めて注目されている。人の手でしかできないケア、誰かの人生に寄り添う実感。そして、教育制度や職場環境の整備によって、安定した収入や長く働ける環境づくりも進み始めている。

『この仕事は、患者さんの人生を動かせて、経済的にも報われる素晴らしい仕事。その価値に気づいて欲しい』

そう語る澤登氏と、氏が設立した株式会社フレアス（以下フレアス）の歩みから、今こそ ahaki を選ぶ理由を探った。

注：訪問マッサージとは、国家資格を持ったあん摩マッサージ指圧師が、自力では通院が困難な方の自宅や介護施設を訪問して行う医療的なマッサージ等の施術を指す。医師の同意書に基づいて行われる。

澤登 拓の選択

病気を抱えた 10 代の澤登氏は、長い引きこもり生活を経験していた。山梨県の六畳一間の部屋で、『自分には未来がない』と感じながら過ごしていたという。しかし同時に、『人と関わる仕事がしたい』『世界へ出たい』という思いも強く抱いていた。祖父は元盲学校校長であり、中国語教師でもあった。その影響から中国語が身近にあり、大学では中国語を専攻した。転機となったのは、中国への留学である。北京中医薬大学で漢方と出会い、漢方薬を服用するうちにみるみる心身が回復していった。

『東洋医学には人を元気にする力がある』

そう実感した瞬間であり、「あはき師」を選択する理由となった。

さらに中国では、多くの人々が温かく接してくれた。日本では居場所を感じられなかった彼にとって、中国での経験は

『自分も必要とされる存在なのだ』

と思える大きな出来事だった。

交換留学では、以前通訳を手伝った中国の教授との再会があり、その縁によって北京中医薬大学へ進む道が開かれた。中国の人々と餃子を一緒に作りながら交流した経験は、人の温かさを強く感じる時間だったという。

帰国後、あはき師の国家資格を取得して接骨院へ就職したが、低賃金で社会保障もなく、現場も厳しい徒弟制度だった。何もわからないまま、初日から患者への鍼治療を任されるなど、不安と緊張の連続だった。

『この業界で本当にプライドを持って働けるのだろうか』

と悩む日々が続いた。こうした中で出会ったのが訪問マッサージだった。健康保険を活用し、通院が困難な人々の自宅を訪問して施術を行う、まさに国家資格を持つ意味があり、プライドを持って働ける仕事だった。社会には外へ出られず苦しんでいる人が数多くいることを知り、地元の山梨で訪問マッサージを開業することを選んだ。現在では株式上場企業の 1 つであるフレアスは、実家の応接間から始まった。

特に忘れられないのが、ALS（筋萎縮性側索硬化症）を患う 40 代女性との出会いだった。会話も難しく、身体もほとんど動かせない女性に一生懸命施術をした。



「あれ？俺ってモテるのかな？って勘違いしました」
と中国留学時代を思い出し、懐かしそうに笑う

『でも、彼女に一番足りないのは希望だと思った... 心を元気にしようと思った』

少しでも笑顔になってほしいと、毎回作り笑顔の練習をして、ネタを考えてから訪問した。ある日の帰り際、女性は懸命に身体を動かし、右足で「ありがとう」の5文字を伝えてくれた。

『役に立たないと思っていた自分が「ありがとう」と言われて、すごく嬉しかった。僕自身が救われたんですね。帰りの車の中では号泣してしまって・・・』

この経験が澤登氏にとっての「ahaki」、そして「訪問マッサージ」の道を決定づけた。

今こそ ahaki という選択

澤登氏は『あはき師は、やりがいと現実的な働きやすさの両立を目指せる仕事だ』と語る。その理由は、訪問マッサージが単に痛みを和らげるだけの仕事ではないからだ。

『ただ寝たきりの人の痛みをとるんじゃないんだ、寝たきりの人の人生を1ミリでもいいから動かせ』

病気そのものを治すことはできなくても、利用者がその日1日や数ヶ月を、希望を持って生活することができる。フレアスではそれを、『時間の価値の最大化』と呼んでいる。

『苦しい苦しい、痛い痛いって言うのが終末期だったら残念じゃないですか』

だからこそ、終末期の時間を自分らしく生きることができたという時間に変える支援をしたいと話す。

この仕事は「ありがとう」を直接受け取ることができる仕事でもある。フレアスに入社したばかりのある全盲の新入社員は、こう話した。「今までやってもらうことが多かったので、ありがとうと言うばかりの人生だった。これからは、ありがとうと言われる人生を送りたい」

半年後、その社員は「訪問マッサージへ行ったら、行く家、行く家でありがとう、ありがとうと言われる」と笑顔で語った。一方で澤登氏は、この業界の課題についても率直に語る。

『あはき師はいい仕事なのに、何で人気がないのかというと食えないの。だから、この業界が発展するには、やっぱり食える事だと思うんです』

自身も資格取得後、月給10万円、社会保険なしという厳しい環境を経験した。だからこそ現在は、魅力ある職場を作ることが業界発展につながると考えている。

フレアスでは年間休日120日以上、平均年収400万円超を実現し、経済的に報われる環境を整えてきた。また、「食える」ようになるための教育にも力を入れてきた。採用初年度だけでも500時間以上の研修を行い、とにかく徹底的に教育する。

『徒弟制度で見て覚えるじゃなくて、雇用主が努力して、より効果的で質の高い教育を提供すべき』



この仕事は視覚障害者にとっても大きな可能性を持つ。フレアスには1,500人の施術者が在籍し、そのうち約500人が視覚障害者だ。障害者雇用率で日本一ともなった。さらに毎月の成績上位者には、視覚障害のある施術者が数多く並ぶ。

『戦力なんです。障害者雇用なんて思う必要がない』

さらに、コミュニケーションが苦手な施術者には『話上手なドライバーをつけますから、大丈夫ですから(笑)』と話す。

『足りないところはフォローすればいいんじゃないかと。フォローすれば能力を発揮することはわかっているんで』

『理想的な職場ができたんじゃないかと僕は自負しているんですよ』
その結果、『この 3 年間、新卒採用者の離職ゼロです』と胸を張る。

『この仕事の魅力を知った上で選ばないなら全然いいんだけど、その魅力が知られていないんじゃないかと。こういう道があると知るだけでも、人生は変わると思うんです。可能性や選択肢として多くの人に「ahaki」を知ってほしい』

澤登 拓の提示する未来

AI 時代だからこそその「ahaki」の魅力について、『これからの AI 時代では、ホワイトカラーの仕事はほとんど無くなっちゃいます。でも手技っていうのは古くて新しい。AI に「あはき」はできませんから。まあ数十年たって、ロボットが「気」みたいなのを出したらかないませんけど』と笑いながら話す。最後に、ひそかな野望についても明かしてくれた。

『会社としてではなく、個人として学校を作り、世界にもって行きたい。優れた日本の「ahaki」教育システムを丸々海外へ持って行きたいんです』

澤登 拓はこれからも「ahaki」の可能性を提示し続ける。



編集後記

澤登 拓氏は、自身の 10 代を『出口のない暗い森の中で迷子になっている感じだった』と振り返る。そんな澤登氏を救ったのが「ahaki」だった。そして、森から抜け出すことができた人間として、今まさに森の中にいる人に、その抜け出し方の一つを示したいと語る。この ahaki vol.06 が、澤登氏のような思いを実現する一助となることを願う。

あはき師紹介

澤登 拓（さわのぼり たく）

山梨県南巨摩郡出身。東海医療学園専門学校卒。
2000 年にふれあい在宅マッサージ（現・株式会社フレアス）を設立。

好きなミュージシャンは玉置浩二とプリンス。



一番幸せを感じる瞬間は？

『娘の授業参観へ行って親子一緒にゲームをしたり、あとは息子のプラスバンド発表会へ行って、PTA として椅子を運んだりやるじゃないですか。それが喜び。椅子を運ぶのが嬉しい。普通の幸せですね』

ahaki 創刊にあたって

北海道の函館市に視覚障害者の方を対象とした「あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師」の養成施設があります。ここで学ぶ仕事のことを、頭文字をとって「あはき師」と呼んでいます。ahaki は、「あはき」の仕事の魅力、伝承医術としての「あはき」の奥深さについて、それらを未来へとつなげていく人を通して伝えていきたいと思います。

第6号は、「株式会社フレアス代表取締役社長 CEOとして業界をリードする澤登 拓氏の歩み」を通して「あはき師」の魅力をお送りしました。引き続きよろしくお願い申し上げます。

ahaki

発行者

国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局函館視力障害センター。
同自立支援推進委員会地域デザイン分科会。公立はこだて未来大学くらしのデザインラボ
vol.06 2026 年 8 月 1 日 発行



プロモーションビデオ
視聴 【QRコード】